田部京子ピアノリサイタル

「プレイアデス舞曲集」より ……吉松　隆

1 前奏曲の映像
2 線形のロマンス
3 夕暮れのアラベスク
4 真夜中のノエル
5 聖夜の聞こえる間奏曲
6 過去形のロマンス
7 多少華やかな円舞曲

即興曲　Op.142 D.935　第3番　変ロ長調　第4番　ヘ短調 ……シューベルト

二つのアラベスク ……ドビュッシー

喜びの島 ……ドビュッシー

交響的練習曲　Op.13 ……シューマン

夏

2000 四季のコンサート
ふれあい音楽会

2000年7月15日(土) 6:45PM
会場：浜松市教育文化会館
主催：浜松音楽友の会

プロフィール

田部京子（ピアノ）

室蘭市生まれ。4歳よりピアノを始め、故田中希代子氏に認められ指導を受ける。東京芸術大学付属音楽高等学校にて田村宏氏に師事。高校在学中の1984年第53回日本音楽コンクールに最年少で第1位に輝き、一躍大きな注目を集めた。東京芸術大学に進学後、1988年より文化庁在外派遣研修員としてベルリン芸術大学に留学、クラウス・ヘルビッヒ氏に師事。ベルリン留学後もエピナール国際ピアノ・コンクール第1位、シュナーベル・ピアノ・コンクール第1位、ミュンヘン国際音楽コンクール（ARD）第3位と数々の国際コンクールで輝かしい成績をおさめている。その後バイエルン放送交響楽団、ヴェルテンベルグ室内管弦楽団、モスクワ・フィルハーモニー交響楽団、ローザンヌ室内管弦楽団と共演し着実に国際ピアニストとしての道を歩み始める。1992年村松賞（音楽部門大賞）受賞。1993年度の演奏活動に対し、第4回新日鐵音楽賞フレッシュアーティスト賞受賞。1996年にはウィーン木管アンサンブル、1997年4月にはカーネギーホール主催によりワイル・リサイタル・ホールにおいてニューヨーク・デビューリサイタルも果たし大好評を得る。現在はレコーディング活動も含め、最も期待される若手ピアニストの一人として、ベルリン、東京を拠点に幅広い活動を続けている。

田部京子
ピアノリサイタル

KYOKO TABE
PIANO RECITAL

曲目解説　宮本賢二郎

●吉松　隆／「プレイアデス舞曲集」より

前奏曲の映像（第Ⅴ巻第1曲）―線形のロマンス（Ⅱ-3）―夕暮れのアラベスク（Ⅴ-5）―真夜中のノエル（Ⅴ-6）―聖歌の聞こえる間奏曲（Ⅲ-5）―過去形のロマンス（Ⅲ-6）―多少華やかな円舞曲（Ⅲ-7）

難解な作品が多い現代音楽にあって、吉松は中世より伝わる7つの旋法を用いた舞曲集を書き続けている。舞曲集はそれぞれ7つの舞曲からなり、現在第5巻までが発表されているが、これらの作品ではバッハの影響が大きく、声部の対位法的な動きにはインヴェンション、形式的には宮廷風の舞曲集である組曲の影響が見て取れる。しかし対位法が織り成す音の陰影、和声的な音の響きは、フランス近代の作曲家達を思わせる。近代フランスの作曲家たちは、中世からバロック期の伝統に立ちかえり、旋法と線の織り成す響きの陰影の中にフランス音楽の伝統を見出そうとした。吉松はバッハからフランスの作曲家たちに連なる精神を継承し、現代のピアノの音色を最大限に生かしつつ、時代に囚われない響きの美しさを生み出している。プレイアデスとは7つの星の星座、和名では昴のことで、この舞曲集を構成する7という数を象徴している。

●シューベルト／即興曲　Op.142 D.935　第3番 変ロ長調　第4番 ヘ短調

1827年、シューベルトが死を翌年に控えた時期に作曲された。第3番は彼が劇音楽「ロザムンデ」にも用いた主題と5つの変奏曲。歌謡的な主題が次第に断片に分解され幻想的に盛り上げられていく技法はピアノ五重奏「ます」を思わせる。第4番はシューベルトには珍しく東欧的な、ハンガリー風のメロディーとリズムをもつ小品。後期ロマン派の異国情緒を強調した作品と違い、3拍子の舞曲風のこの小品で彼はハンガリー風の要素を誇張することなく、あくまでも上品で華やかな作品に仕上げている。

●ドビュッシー／2つのアラベスク

2つのアラベスクは彼の作品の中でも初期に書かれた作品。若く研ぎ澄まされた響きへの感覚、線的な響きの陰影、計算された知的なリズムの構成は後年のピアノ、オーケストラの大作にも通じている。アラベスクとは「アラビア風」という意味だが、第1曲はモーツァルトにも時折見られるアラビア風の旋律の動きを用い、分散和音や線が生み出す響きは明らかにバッハの前奏曲を思わせる。第2曲ではアラビア風の旋律の装飾、リズムが軽やかに、そして優雅に模倣される。19世紀の作曲家が単にアラビア風旋律の中に異国情緒を求めたのに対して、ドビュッシーの音楽は、バッハを経てヨーロッパの中世の旋法、そして更には、その教会の音楽を生んだグレゴリオ聖歌の起源であるビザンチン文化が香る静謐を持った響きとして蘇っている。

●ドビュッシー／喜びの島

この曲は、同じ年（1904）に作曲された「仮面（マスク）」とよく比較され、好対照をなしている。印象派の画家ワットーの「シテール島への船出」から得た印象を音楽に表したと伝えられているが確かな証拠もない。この年よりドビュッシーは妻の元を去り、愛人エマ・バルダックとの同居を始めるが、この新たな生活への期待が「喜びの島」の隠れた標題であるともいわれている。彼自身「なんと難しい曲だろう」と語るこの作品には、早く細かな動きの中に華やかな技巧が駆使されるが、全体には、あたかも希望や期待を思わせるように躍動感がみなぎり、めまぐるしい音色の変化の中にも明るい色彩感が支配している。

●シューマン／交響的練習曲　Op.13（遺作付き）

24歳の時着手したこの作品は、第1曲とその変奏曲から成るが、作曲当時シューマンはエアンスティーネという女性に恋しており、変奏曲の主題は彼女の父親によるものとされている。主題に伴奏をつけたシューマンは次第に変奏曲を書き続け、3年後には「12の交響的練習曲」として出版された。そのタイトルからも伺えるように、革新的な奏法を随所に取り入れ、シンフォニックな音響を生み出し、彼のピアノ作品の中でも「謝肉祭」と並ぶ大作として評価されている。メロディー、和声、曲想、リズムの構成、感情表現の全てにおいて、既に後期ロマン派の響きと情緒を思わせる充実した内容をピアノで表現することに成功した。この作品の一つ一つの変奏曲には、若きシューマンの変奏技法とピアノ表現へのアイデアが溢れている。変奏曲は当初出版された12曲の他にも5曲（遺作）が作曲されており、今日ではこの5曲を加えて演奏される機会も多い。